

福建伝存日本文献の調査および考察

谷井 俊仁

三重大学

総 説

さる2000年11月19日から26日にかけて、谷井と天理大学文学部非常勤講師¹伍躍の二人は、厦門大学、福建師範大学、福建省図書館の三ヶ所に赴き、日本寺院旧蔵文書、および関連書籍の有無について調査を行なった。各機関における成果は以下に記すとおりであり、総体的には期待されるほどの成果はなかったと言わざるをえない。渡航前は琉球関係の文書があるのではないかと予想していたのであるが、それすらもなかった。

そもそも中国においては、書籍の収蔵は図書館、文書は檔案館、書画は博物館と役割分担されている。今回の調査によって、厦門大学に戦時中の「末次情報資料」があることを確認しえたが、基本的に大学、図書館に文書はないというのがはっきりした。

しかしそれならば福建省の檔案館において日本関係古文書が発見しうるかという点、福建師範大学図書館副館長の方宝川氏は、おそらくないであろうとの考えを示された。福建省に関しては、琉球史研究者が親密な関係をもっており、最近その尽力によって、北京の第一歴史檔案館にある清朝側の琉球関係檔案が公開されている。しかし琉球側の史料が福建に残っているとの話は特には伝えられていない。それが果して方氏の言うように無いためであるのかどうか、今後更なる調査が必要であろう。

和刻本については、福建師範大学にまとまった件数がある。しかしこれは稀な例で、多くは福建省図書館のように、中国刊本と分別せず収蔵しているため、その存在が認識されていないと思われる。しかも師範大にこれだけの数があるのは、国民党の遺留物という歴史的経緯があるためであり、そのような条件のない普通の大学、図書館にどれだけの和刻本があるのかは疑問である。

普通書については、意外なほど存在していた。敗戦にともない在福建日本機関所蔵図書が接収されたケースのほかに、満鉄をはじめとする各地の日本機関、日本人の旧蔵書が古本として市場に出回り、それを購入したとおぼしきケースも確認された。また、後に添付されている貸し出しカードをみると、意外と利用されている²。これらは、日中学術交流史の重要なテーマとなる。

以下、第一節で各機関ごとに和書の収蔵状況をのべる。第二節では、戦前の厦門、福州において日本人が如何なる文化活動を行っていたのかを概観し、第一節で明らかにした事実

を位置づける。

第一節 各機関の調査報告

1) 厦門大学図書館

1 住所 福建省厦門市思明南路422号

2 面会者 図書館長 陳明光、助理 向玉軒、日本語教育研究中心主任 紀太平
特に紀副教授にはお世話になった。

3 調査日時 2000年11月20、21日

4 調査概要

図書館の蔵書量は207万冊ある。年間図書経費は300万元あるが、半分は雑誌、新聞などの定期出版物の購入に充てられるので、新刊書はほとんど買えない状況である。

目的の日本古文書はない。琉球関係のものもない。しかし明治から戦前に至る普通書はかなりある。1972年以前に収蔵したものが同じ書架に配架されており、またそれらの目録は作られていないので全体像の把握は難しいが、1972年以前のは8200冊くらいあると思われる（目視概数）。

これらの普通書は以下のように、様々なルートで集められたものである。特記すべきは、在厦門の日本機関、日本人の蔵書が敗戦によって接收されたことで、それらが蔵書のかなりを占めていると予想される。また日本の情報機構末次研究所が収集したいわゆる『末次情報資料』がある。実物は見なかったが、これらはすでに中国で影印出版されている（中文部分99冊+索引1冊、英文部分54冊、日文部分56冊、広西師範大学出版社）。

5 蔵書細目

蔵書を抜き取り調査し、そこにみえた蔵書印、注記などを記す。以下、福建師範大学、福建省図書館も同じ。

i 領事館関係

和田清編『支那官制発達史(上)』中華民国法制研究会、昭和十七年
蔵書印「在厦門大日本帝国総領事館図書室」

『戎克——中国の帆船——』中支戎克協会、昭和十七年再版
蔵書印「在厦門大日本帝国総領事館」「厦門戎克協会」

注記「堀氏ヨリ寄贈 18.8.4」

ii 興亜院関係

江川英文『中華民国に於ける外国人の地位』中華民国法制研究会、昭和十三年
蔵書印「興亜院厦門連絡部図書之印」

小山栄三『人種学概論』日光書院、昭和十四年

蔵書印「興亜院厦門連絡部図書之印」

書店シール「Lib. BENIYA HORIKIRI KATSUSHIKA TOKYO JAPAN」

iii 海軍関係

小笠原長生『聖将東郷平八郎伝』改造社、昭和九年

蔵書印「厦門海軍集会所図書之印」

iv 教育機関関係

鄭自明著、富樫長栄訳『支那地方政制史』人文閣、昭和十六年

蔵書印「私立海疆学術資料館図書登記」

藤田元春『日支交通の研究 中近世編』富山房、昭和十三年

蔵書印「南京日本中学校図書」

v 満鉄関係

太平洋協会『南洋諸島』河出書房、昭和十六年

蔵書印「南満州鉄道株式会社撫順炭砒蔵書之印」「南満州鉄道株式会社撫順炭砒資料室、16・3・10」

フィヒテ著、出口勇蔵訳『封鎖商業国家論』弘文堂書房、昭和十三年

蔵書印「南満州鉄道株式会社蔵書之印」「満鉄上海事務所図書印」「上海 満鉄事務所」

書店シール「上海北四川路 三通書局 電話46073」

vi 国防部関係

西田保『左宗棠と新疆問題』発行所不明

蔵書印「国防部史政局図書資料室」

S.D.ギャンブル著、福武直訳『北京の支那家族生活』生活社、昭和十五年

蔵書印「国防部史政局図書資料室」

図書登録「福建省研究院図書登記号碼 史字第3580号」

vii 個人関係

張廷彦、田中慶太郎『官話文法』文求堂、大正九年再版

蔵書者記入「福田」

接收印記「査本書係接收敵産而來為保存真實便利研究起見故内容謬誤之處不予刪除」

(訓読 査するに本書は敵産を接收して来るに係る。真實を保存し研究に便利の起見の為に、故に内容謬誤の処は刪除を予えず。)

笹沢三善『水産王国』宝文館、大正十五年

蔵書印「李祖超蔵書」「萬朝報社蔵書」

書店シール「上海旧書店」

viii その他

鴛淵一『満洲碑記考』日黒書店、昭和十八年

購入表記「昭和18年五月 京都彙文堂ヨリ購入」

稲上四郎『信念を培ふ葉がくれ感話』巧人社、昭和十七年

書店シール「南支厦門大島書店、電話156/483番」

大川周明『日本及日本人の道』行地社、大正十五年

印記「軍事教育図書」

2) 福建師範大学図書館

1 住所 福建省福州市倉山区上三路8号

2 面会者 図書館副館長 方宝川教授、古籍部主任 鄭輝、前館長 方品光³

特に方副館長にお世話になった。

3 調査日時 2000年11月23日

4 調査概要

蔵書は200万冊、うち線装本が20万冊を占める。線装本は、国民党政府が台湾に逃げる際に持ってきたが、そのまま遺留されたものとのことである。年間図書経費は170万元ある。

うち普通日本書は、1973年までの登録分が9254冊、1974年から2000年9月までのが12800冊である。新刊書の購入はなく、姉妹校である琉球大学との交換だけである。日本書の担当者はいない。

師範大で特記すべきは、和刻本がまとまった数存在することである。これらについては前館長方品光氏が「中日文化交往信物——館蔵日本和刻古籍述略」なる論考を書いており、その中で和書のリストも紹介されている（「館蔵日本和刻古籍一覧表」）。我々は、閲覧室で偶然方氏にお会いすることができた。氏の話によると、これは王勇氏による在中国和刻本目録作成に寄与するため作られたとのことである。

方品光氏の論考によると、『小草齋詩話』には富岡鉄斎の「鉄斎外史」の蔵書印があり、また重野安繹『成齋文初集』には、清末の駐日大使であった黎庶昌の蔵書印があるという。黎氏は貴州省遵義の人、曾国藩の幕友となる。ついでイギリス、ドイツ、フランス、日本などに駐在し、駐日大使を二度にわたり務めた。日本における楊守敬の上司であり、また重野安繹、岡千仞といった学者達と交友をもった。本書は、重野から黎氏に寄贈されたものであろう。

楊守敬による日本文献の収集は有名であるが、この事例は、黎庶昌による収書も一定程度あったことを窺わせる。その後黎氏の蔵書がどのようになったのかは、今後検討を要する課題となろう。なお「館蔵日本和刻古籍一覧表」を、本稿の末尾に附録として転載した。

他には「文雄」名による絵画が一点ある（「日人文雄仕女図」）。また、普通書は厦門大以上に様々なルートから形成されている。

5 蔵書細目

①和刻本

宋・葉廷珪『海録碎事』文化十五年刊本
蔵書印「水島蔵書」「福建師範学院図書館蔵書印」

日・仰木弘邦撰『古刀銘尽大全』寛政三年刊本
蔵書印「祝氏楽古斎珍藏書画印」

朝鮮・柳希齡撰、明・郭天中等校『朝鮮史略』文政五年刊本
蔵書印「国防部図書館蔵書」

清・沈徳潜評『杜詩偶評』享和三年刊本
蔵書印「味青斎蔵書」

②普通本

i 満鉄関係

高橋嶺泉『満鉄地方行政史』満蒙事情調査会発行、発行年不明
蔵書印「南満州鉄道株式会社図書印」「鞍山図書館」
印記「創業式拾周年記念図書」

広瀬浄慧『大東亜経国誌』日本出版社、昭和十八年
蔵書印「南満州鉄道株式会社蔵書之印」「満鉄上海事務所図書印」「上海 満鉄事務所」
書店シール「上海 内山書店」

ii 国防部関係

大谷光瑞『興亜計画』大乘社・有光社、昭和十四年
蔵書印「中華航空株式会社」「国防部史政局図書資料室」
書店シール「革耕書店 南京明瓦廊七十二号」

佐藤留雄編『注解支那時文之階梯』同文社
蔵書印「国防部図書館」
図書登録「福建省研究院図書登記号碼 国字第2227号」

iii 個人、各種機関

和辻哲郎『日本古代文化』岩波書店、昭和十五年
蔵書印「廖雍蔵書」「国防部図書館」「国防部史政局移交図書」「福建師範学院図書館」

『国訳漢文大成 還魂記・漢宮秋』国民文庫刊行会
蔵書印「遠藤蔵書」「福建師範学院図書館蔵書印記」
図書登録「福建省研究院図書登録号碼 史字第4566号」

野依秀市『英国打倒欧州参戦の主張』秀文閣書房、発行年不明
蔵書印「軍報道部蔵書」
表記「馬淵大佐寄贈」

『引照新約聖書 詩篇附』日本聖書協会刊
蔵書印「南京日本Y.M.C.A」

3) 福建省図書館

1 住所 福建省福州市湖東路227号

2 面会者 特蔵部（古籍部）副主任 林永祥、外文部主任 柯少寧、同日本語担当 齊寧
師範大の方副館長から特蔵部の劉大治氏に紹介状を書いてもらったが、当日氏は不在で、
かわりに林氏が対応した。

3 調査日時 2000年11月24日

4 調査概要

特蔵部の林氏によると、図書館は書物を扱うのであり、文書はあるとしたら檔案館、書画は博物館である。線装本は30万冊あるが、和刻本を特には分類していないので、それがどれほどあるのかははっきりしない。

外文部の齊氏の話では、81年まで旧分類、82年以後が新分類であわせて和書は2万冊ぐらいある。年間購入分は数十冊で、それ以外は長崎県、沖縄県図書館との交換分である。旧分類書の大半は、本図書館の前身、烏山図書館から引き継いだものである。

確かに我々が実見しても、普通書がどこ由来なのかを示す蔵書印はあまり見当たらなかった。

5 蔵書細目

安井息軒『左伝輯釈』二巻、春風館蔵板、明治四年序

第二節 廈門、福州における日本人の文化活動

江戸時代、福建人は日本にきて様々な文化活動に従事していた⁴。一方、日本人が福建で活躍するのは、明治以降、特に日清戦争による台湾領有（1895年）以後であり⁵、それにともない日本人による文化活動も活発になっていく。民間においてその中心を担ったのが東亜会と同文会であり、両者は1898年に合併して東亜同文会となる⁶。その支部が福州にあり、翌年には『閩報』なる中国語新聞の発行を支援した⁷。また同年、支部長の中島真雄が福州東文学社（後の全閩師範学堂）を開き、中国人教育に従事している⁸。これは、福建において日本人が初めて本格的な教育事業にたずさわったものとして、注目すべきことである。

福州以外の地では、東本願寺の布教活動の一環として教育活動が推進され、1898年、加藤広海が廈門、漳州、泉州に布教所をつくり、翌年には田中善立が泉州に新化学堂を設立した。また、長瀬鳳輔によって廈門東亜書院が、清水友輔によって漳州中正学堂が開設されている⁹。

このように台湾領有後、福建における日本人の文化、教育活動が盛んになる。そこには布教のような宗教的動機もうかがえるが、より重要なのは、当時の台湾総督児玉源太郎（在任1898～1906）による積極的な支援である¹⁰。その背景には、台湾統治を完成させるためには、海峡をはさんで対岸にあたる福建に日本の勢力を伸張させる必要があったことがあげられる¹¹。戦前の日中関係において、文化とはきわめて政治的な問題であった¹²。

清代、台湾は台湾府として福建省に属しており、両者は交易、人の往来など密接な関係を保っていた。しかし台湾領有によってそれは切断される。新たな関係の設立のためには、まづもって台湾側の戸籍制度、貿易制度の整備が不可欠となる。

台湾における戸籍制度は、1905年の第一回臨時戸口調査によって一応の基礎が与えられる¹³。貿易の方は、清朝以来、淡水、基隆、安平、台南、打狗に開かれていた税関が統廃合され、

1909年淡水税関に統合される。また島内の要地21ヶ所に監視署が設けられ、密輸の防止に努めていた¹⁴。このように台湾は制度的には福建から切り離されていくが、一方で両者の実質的な関係、すなわち経済関係は清朝時代以上に強まっていった。

領台後、伸びた貿易品目に石炭がある。台湾における石炭採掘は、17世紀のオランダ人占領時代からおこなわれたが、その後は進展を見なかった。清朝によって、1870年に採掘が公許されたものの、清仏戦争、日清戦争もあり、やはり目立った成績はなかった。ところが、日本領有後の1896年、内地人に台湾への自由渡航が認められると、鉱産資源に目をつけて渡航する者が多く、ここに台湾鉱業規則が發布された¹⁵。これ以後、台湾の石炭業は隆盛にむかい、それらは対岸地域に盛んに輸出された¹⁶。

ほかにも砂糖、海産物などの一次産品、綿布、マッチなどの二次産品が輸出された。このように両者の経済関係は密接の度を加え、その結果、福建に多くの台湾籍民が居留するに至ったのである。

事実、廈門に日本領事館が置かれたのは、領台直後の1896年のことであり、これは台湾総督の稟議に基づくものであった。以後、日本は台湾統治の安定のため廈門に勢力を伸張することを目指し、同年に締結した日清通商航海条約議定書にもとづいて租界開設交渉を始める。その結果、99年に廈門日本専管居留地取極書がかわされ、ここに廈門日本租界が成立する¹⁷。

福州には1899年に領事館が設置された¹⁸。この地についても、同年に締結された「福州日本租界條款十二箇条」「別約五箇条」によって租界が認められていたが、廈門のように実現することはなかった¹⁹。しかし、福建省の省会であるだけに、在留する内地人、台湾人は多く、居留民会、籍民公会が組織されていた。

ところが日清戦争、義和団事件、日露戦争を通じて、次第に日本の目は朝鮮、満洲、華北といった北方、ないしは上海、漢口などの華中に移っていき、福建地方は国家の関心事からそれていくようになる²⁰。1898年、清朝に福建不割譲を約束させ、1900年、廈門に一時的に出兵したのがめぼしい行動であって、1912年の「支那に関する外交政策の綱領」では、「強テ福建ニ於テ利権扶植ニ関スル事功ノ急ヲ求ムルモ其功ナカルベク」と、福建への勢力伸張の意欲は大幅に減退している²¹。事実1936年段階の日本の投資状況を見ると、福建を含む華南全体の投資額は、華中、華北のそれに遠く及ばないのである²²。

華南	165,000円
上海	26,246,000円
漢口	1,720,000円
揚子江下流域	681,000円
青島	20,000,000円
天津	14,655,000円
済南	1,551,000円
北京	430,000円
華北諸都市	3,413,000円

蒙疆

613,000円

このように華南は、完全に華北、華中諸都市の後塵を拝するに至ったのであり、

華南に於ては、台湾籍民の極く小規模な工業を営むものがあるが、内地人の営む雑工業としては、汕頭の製氷業、廈門の金属機械、器具工業の数社以外に特記すべきものはない²³。

というように、日本による中国支配の本道からはずれてしまうのである。

このことは、福建の中心都市である福州、廈門についても当てはまる。1934年現在における、在福州、在廈門の内地人の主要企業は以下のとおりであり、小規模なものでしかなかった²⁴。

〔福州〕

主要企業：台湾銀行支店、南国公司支店、大阪商船会社支店、大福洋行

資本金一万円以上：広貫堂（貿易）、桴船洋行（倉庫業）、天田洋行（日用品雑貨）、東来閣（貿易）、昭恵洋行（バナナ販売）、大吉洋行（茶・雑貨）、常盤（料理店）

その他：菜種・海産物・綿布・青果・電気器具販売業、写真業、新聞経営

〔廈門〕

主要企業：台湾銀行支店、大阪商船会社支店、南国公司支店、中和盛薬房、隅田洋行（薬品・雑貨）

その他：菜種・雑貨・陶器・機械類・海産物・食料品販売業、旅館、新聞経営²⁵

一方台湾人は、領台以前から福州、廈門と密接な関係をもっていた。彼らは、農林業、鉱業、漁業、各種製造業に従事し、居留者は多かったが、これらの事業も同様に零細なものでしかなかった²⁶。

このように福建は、日本の中国支配の本筋からは外れてしまう。それが再び深い関係をもつのは、1938年の日本軍による廈門攻略、福建沿岸の封鎖以降であるが、台湾との貿易、人的交流、さらには南方への進出基地として、一定程度の日本人は常に居留していた²⁷。

福建における日本人の生活についてみると、1918年には、華南地方在留内地人、台湾人の要望を受け、日中合弁で財団法人博愛会廈門医院が開設され、翌年には福州でも開業している²⁸。廈門の人口は、日本の攻略後の1940年12月現在、市部に12万人、鼓浪嶼島に5万人を数えたが、うち台湾人は1万人、内地人は1500人にのぼった²⁹。このように廈門、福州にそれなりの日本人が居留するとなると、子弟の教育が問題となってくる。これは内地人、台湾人双方に当てはまる問題であった。

福建における内地人子弟の教育は、居留民会の主導のもとに行なわれ、福州日本人小学校、廈門日本尋常高等小学校、同鼓浪嶼分校が設立された。それらの規模は以下のとおりである³⁰。

福州日本人小学校 厦門日本尋常高等小学校 厦門鼓浪嶼分校

1936年9月現在

児童数	5 6	5 1
学 級	3	3
教員数	5	4

1939年6月現在

児童数	1 0 2	1 5
学 級	3	1
教員数	4	2

一方、台湾籍居留民については、総督府の援助をうけて、各地の籍民公会在教育機関を設置した。福州東瀛学校、厦門旭瀛書院がそれである³¹。

前者は、福州の台湾公会の経営に係る。1905年、福州東瀛会館内に生徒 9 名を集めて授業を始めたのが前身で、1908年福州領事の要請により総督府が後援を始めている。1915年には東瀛学校を名乗り、学級は台湾人に本科 6 年、中国人に特別科3年があった。

後者は1909年、同じく厦門の台湾公会によって民家で始められたのが前身で、翌年には総督府から教員が派遣され、校名を旭瀛書院とした。城南西安宮に本院を置き、鼓浪嶼島など 3 箇所に分院を置いていた。

両校の教員、学生数は以下のとおりである³²。

	福州東瀛学校			厦門旭瀛書院		
	内地人	台湾人	中国人	内地人	台湾人	中国人
1934年						
教 員	5	1	3	7	14	
学 生		196	114		425	103
1935年						
教 員	5	1	3	8	15	
学 生		198	124		466	94
1936年						
教 員	5	1	3	8	18	
学 生		223	109		524	91
1937年						
教 員		1	1	10	18	
学 生	6	214	98		760	119
1938年 ³³						
教 員	6	1	1	10	18	
学 生						

これ以外に西本願寺が経営する廈門僑南女子中学校があった。校長は王兆麟、台湾人職員11名がいた³⁴。

以上、福建における日本の文化事業を、特に教育に焦点を絞って概観してきた³⁵。そこから窺えるのは、福州と廈門には日本人、特に台湾籍民が多く居留しており、台湾総督府の援助の下、それらの子弟に初等教育が行なわれていたことである。小学生は福州に内地人でおおよそ50名、台湾人で200名、廈門には内地人50～100名、台湾人500名がおり、子供たちの後ろに両親、親族がいたことを勘案するならば、福州、廈門市内では日本語がある程度使われており、居留する日本人自らがおこなう文化活動も一定程度あったことが予想される。

そのような観点からすると、今回の調査でかなりの和書、特に明治以後の普通書が福建師範大学、廈門大学で確認されたのも納得がいく。図書の購入・所蔵は、端的に彼らの文化活動を示すものだからである。特に興味深いのは廈門大学のもので、そこでは日本の在廈門各種機関、すなわち領事館、海軍、興亜院の旧蔵書が確認される一方で、居留民による文化活動の一面を窺わせるものが多く見出された。

まずは大島書店なる日本人経営の書店が存在したことが判明した。これは、廈門在住の内地人、台湾人相手の書店であったと思われる。また私立海疆学術資料館なる団体は、私設の図書館であったに違いない。

堀氏の所属していた廈門戎克協会は、中支戎克協会の廈門支部であろう。領台以前から、台湾・福建間の交易はジャンクによって行なわれており、1933年段階においても、台湾の対華南輸出額330余万円中、37%に相当する120余万円はジャンクが運んでいた³⁶。ジャンクは、廈門において決して前代の遺物ではなかったのである。

個人の蔵書も興味深い。中国語学習書である『官話文法』を福田氏が所有していたのは当然であろうが、昭和18年に出版された『満洲碑記考』が、出版直後に京都の彙文堂で購入され、廈門に持ちかえられている。この購入者は、おそらく中国史に造詣の深い人物に違いない。

戦前の中国における日本人の生活、特に文化面に関する生活は、北京、上海といった大都會、満洲においては明らかであろうが、福州、廈門のような南中国では必ずしも明らかになってはいないと思われる。「要するに華南に於ける、五十年に亘る日本の投資事業は可成の発展をしてゐるが、之を華北華中に比すれば在留日本人の寡少によつて著しく劣つてゐる³⁷」と評されるように、福建は経済的にはみるべきものがなかった。されば、そこにおける日本人の活動が、注目されてこなかったのは無理もない。

しかし内地人と呼ばれる日本人と本来中国人であった台湾人なる日本人が、福建の中国人社会の中に生活していたことを考える時、そこに微妙かつ複雑な文化問題が存したことは想像に難くない。たとえば今回の調査で、李祖超なる人物が『水産王国』なる日本書を持っていたことが明らかになった。これは、萬朝報社の蔵書が古書店、おそらく上海旧書店に流れ、それを李氏が購入したものであろう。『水産王国』とは、いかにも海産資源の豊かな廈門で読まれるのに相応しい書であるが、なぜ李氏がこの本をもっていたのかを考えると興味深い。李氏は日本語を解するのであるが、彼は中国人であったのであろうか、それとも台湾人とい

う名の日本人であったのであろうか。ここには、複雑な文化問題が潜んでいる。また、福州東瀛学校、厦門旭瀛書院では、台湾人と中国人がともに学んでいた。とすれば、そこにおける国籍、民族とは何であったのかが問題となろう。

このように福建という地域は、中国、台湾、日本といった三つのアイデンティティーが複雑に錯綜する場であったのである。今回の調査によって、福建のそのような性格が明らかになり、今後の課題が示されたということができよう⁸⁾。

〔附録〕 福建師範大学所蔵和刻本目録

以下は、方品光「中日文化交往信物——館蔵日本和刻古籍述略」館蔵日本和刻古籍一覧表を転載したものである。簡体字をおこすにあたっては、主として以下の書目、図書検索を参照し、誤りと思われるものは補正した。

『帝国図書館図書名目録』第四篇（1912～26）、帝国図書館、1937年

『国書総目録』全9冊、岩波書店、1963～76年

『大阪府立図書館蔵書目録』全16冊、大阪府立図書館、1972年

長沢規矩也『和刻本漢籍分類目録』汲古書院、1976年

『国史大辞典』全17冊、吉川弘文館、1979～97年

『京都大学人文科学研究所漢籍目録』京都大学人文科学研究所、1979～80年

『国立国会図書館蔵書目録 明治期』全8冊、国立国会図書館、1994～5年

国立情報学研究所NACSIS Webcat

一切経音義一百卷	唐 釈慧琳撰	元文二年（1737）扶桑洛東獅谷白蓮社刊本
統一切経音義十卷	遼 釈希麟撰	延享三年（1746）高野山北室院刊本
賈子新書十卷	漢 賈誼撰	寛延二年（1749）皇都書林刊本
三礼図二十卷	宋 聶崇義撰、日 菊池武慎点	寛政二年（1790）崇文堂刊本
古刀銘尽大全上下巻	日 仰木弘邦撰	寛政三年（1791）濃州刺史刊本
衆妙集	宋 趙師秀編	享和元年（1801）日本官刻本
皮子文藪十卷	唐 皮日休撰	享和二年（1802）日本官刻本
杜詩偶評四巻	清 沈德潜評	享和三年（1803）日本刊本
唐土名勝図会六巻	日 木村孔恭撰、岡田友尚等図	文化二年（1805）浅文貫書肆刊本
海録碎事十二巻	宋 葉廷珪撰	文化十五年（1818）日本刊本
朝鮮史略	朝鮮 柳希齡撰、明 郭天中等校	文政五年（1822）日本官刻本
小草齋詩話三巻	明 謝肇淛撰	天保二年（1831）日本抛読耕齋本摹刻
毘陵集二十巻	唐 独孤及撰	天保四年（1833）東京松山堂刊本
閩史約書（歴代地理図）	明 王光魯撰	天保十年（1839）京都松本氏家刻本
日本外史二十二巻	日 頼襄撰	天保十五年（1844）松平氏刊本

大平御覧一千卷	宋 李昉等輯、日 鈴木清照序	安政二年（1855）江都喜多邨氏学訓堂聚珍版
破邪集八卷	明 徐昌治編	安政二年（1855）日本刊本
地理全志上篇五卷下篇十卷	英 慕維廉撰	安政五年（1858）日本爽快樓刊本
隔鞞論	日 塩谷世弘撰	安政六年（1859）日本快風堂刊本
文石堂重刊曹氏吉金図二卷	清 曹奎輯	明治十五年（1882）京都文石堂刊本
尊攘紀事八卷	日 岡千仞撰	明治十五年（1882）京都龍雲堂刊本
松陰詩集二卷	日 吉田矩方撰	明治十六年（1883）尊攘堂刊本
耕香館画贖	日 瀧和亭画	明治十七年（1884）東京瀧氏耕香館刊本
経籍訪古志六卷	日 森立之撰	明治十八年（1835）日本刻本
観光紀游十卷	日 岡千仞撰	明治十九年（1886）石鼓亭印本
宗門葛藤集	日 矢野宗雄編輯	明治十九年（1886）名古屋松屋書店印本
鬢糸懺話	日 初山逸也撰	明治二十三年（1890）東京大倉書店印本
史記評林一百三十卷	漢 司馬遷撰、明 凌稚隆輯	明治二十四年（1891）東京三松堂松果堂刊本
支那疆域沿革図略説	日 重野安繹、河田龍撰	明治二十九年（1896）日本輿地学会刊本
成齋文初集三卷	日 重野安繹撰	明治三十一年（1898）東京曙戒軒刊本
鉄兜遺稿二卷附録一卷	日 河野維龍撰	明治三十二年（1899）東京白鷗樓刊本
寒山詩集	唐 積寒山撰	明治三十八年（1905）抛島田翰手校宋本印本
古文旧書考	日 島田翰撰	明治三十八年（1905）東京民友社印本
支那画家落款印譜	日 齋藤謙編纂	明治三十九年（1906）東京大倉書店印本
大日本創辦海軍史二十五卷	日 勝安芳撰、中島雄等訳	明治三十九年（1906）東京吉川弘文館印本
瑩雪軒叢書	日 近藤元粹評選	明治三十九年（1906）大阪青木崇山堂印本
杜工部詩醇六卷	唐 杜甫撰、日 近藤元粹評選	明治四十一年（1908）大阪青木嵩山堂印本
李太白詩醇五卷	唐 李白撰、日 近藤元粹評選	明治四十二年（1909）大阪青木嵩山堂印本
論画百絶	日 大村西崖撰	明治四十三年（1910）東京巧芸社印本
櫟翁稗説二卷	朝鮮 李齊賢撰	大正二年（1913）東京民友社印本
小万柳堂劇蹟	日 東京美術学校編	大正三年（1914）東京審美書院石印本
天文板論語	日 梅山玄秀重輯、仙石政和考異	大正五年（1916）大阪南宗寺刊本
蒼海全集六卷	日 副島種臣撰、副島道正輯	大正六年（1917）東京日清株式会社印本
密教發達志五卷	日 大村西崖撰	大正七年（1918）東京仏書刊行会刊本
篁村遺稿二卷	日 島田重礼撰	大正七年（1918）東京双桂樓印本
碩水先生遺書十二卷	日 楠水孚嘉撰	大正七年（1918）守待室漢口日本租界地印本
静嘉堂秘籍志	日 河田龍撰	大正八年（1919）東京静嘉堂文庫印本
愛吾廬題跋	清 呂世宜撰	大正十二年（1923）東京築地活版製造所印本
宝左盒文	日 内藤虎次郎撰	大正十二年（1923）日本平安刊本
古籀篇一百卷	日 高田忠周撰	大正十四年（1925）東京説文樓藏版凸版印刷株式会社印本
北潜日抄二卷	日 安井衡撰	大正十四年（1925）東京鉛印本
東瀛困棋精華	日 陶審安編訳	昭和四年（1929）東京高橋印刷所印本

学思録鈔二卷	日 久米順利撰	昭和五年(1930) 日本印本
支那画	日 飯場米雨編、福井利吉郎序	昭和八年(1933) 東京大塚巧芸社印本
卜辞通纂攷釋	中 郭沫若撰	昭和八年(1933) 東京文求堂印本
支那南画大成	日 河井荃廬等監修	昭和十一年(1936) 東京興文社石印本
書契淵源	日 中島竦撰	昭和十二年(1937) 東京文求堂印本
元憲台通紀	元 趙承禧撰	昭和十三年(1938) 京都彙文堂書莊印本
心画帖	日 八寿慈薫編	昭和十四年(1939) 京都本派本願寺印本
昭和法帖大系十五卷	日 辻本勝巳編	昭和十六年(1941) 大阪駈々堂書店印本
明清挿図本図録	日 薄井恭一編	昭和十七年(1942) 東京共立社影印本
印度支那仏寺浮彫拓本集 (アンコール・ワット拓本集)	日 高崎光哲編	昭和十九年(1944) 京都印書館印本
支那正観草稿	日 有賀長雄撰	日本刊本
活套方	日 皇医官中法眼門人玄徳藏	日本旧鈔本

注

1. 現京都大学人文科学研究所非常勤講師
2. 例えば厦門大学では、傅衣凌が根岸信の書を借り出していた。
3. 方氏には「福建刻書対日本雕板印刷的影響」『福建師範大学学報』哲学社会科学版、1992年第3期なる論文がある。
4. 小葉田淳『史説日本と南支那』野田書房、1942年。
5. 植田捷雄『支那に於ける租界の研究』巖松堂書店、1941年、374～375頁。
6. 東亜同文会については、翟新『東亜同文会と中国——近代日本における対外理念とその実践』慶應義塾大学出版会、2001年が詳しい。
7. 「日本の対支投資——第一調査委員会報告書——」東亜研究所、1942年、878頁。翟新『東亜同文会と中国』25頁、注(22)。
8. 翟新『東亜同文会と中国』85頁
9. 「日本の対支投資」878～879頁
10. 「日本の対支投資」879頁
11. 植田捷雄『支那に於ける租界の研究』375頁
12. 戦前の日中間における文化問題については、馬場明『日中関係と外政機構の研究——大正・昭和期——』原書房、1983年が詳しい。
13. 『台湾事情』大正十四年版、台湾時報発行所、1926年、15頁
14. 『台湾事情』大正十四年版、365～366頁
15. 『台湾事情』大正十四年版、336、347頁
16. 『台湾事情』大正十四年版、371頁。大蔵省管理局『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第二十八冊中南支篇、70頁
17. 植田捷雄『支那に於ける租界の研究』375～376頁。ただし外務省編『日本外交年表並主要文書1940-1945』外務省、1965年の附表、大公使館領事館開設日時表では、厦門の領事館(ないし出張所)の開設を、1875年4月8日とする。
18. 外務省百年史編纂委員会編『外務省の百年』原書房、1969年、1392～1393頁。ただし『日本外交年表並主要文書1940-1945』附表、大公使館領事館開設日時表では、福州の領事館(ないし出張所)の開設を、1872年9月4日とする。
19. 『日本外交年表並主要文書1940-1945』では1899年における。植田捷雄『支那に於ける租界の研究』385頁では1898年とする。
20. 「一九〇〇年義和団の乱鎮定より欧州大戦前(一九一三年)迄は対華工業の全面的進出の時期と推

定せられる。この時代の発展は目覚ましい。それは日清戦争、北清事変等の試煉を経て明治以来の経済政策の最初の成果が見られたと云ひ得よう。時恰かも満洲を舞台として日、露の角逐があつたが日露戦争の結果、南満洲乃至華北に於ける積極的進出は顕著となり日本船舶の往来、在華日本人の増加も目覚ましく、それと関連して日本国内自身の産業的発展も著しく銀行金融関係の「海外投資機関」の創設に伴ひ工業部面に於ても画期的な発展を遂ぐるに至つた。」大蔵省管理局『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第二十七冊中南支篇、313頁

21. 古屋哲夫『日露戦争』中央公論社、1966年、14、21頁。この後のめぼしい事件としては、1919年日貨排斥にもとづく衝突である福州事件がある。
22. 『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第二十七冊中南支篇、324～326頁
23. 『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第二十七冊中南支篇、326頁
24. 『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第二十八冊中南支篇、61～62頁
25. 『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第二十八冊中南支篇、64頁によると、厦門には三井物産の支店もあったとある。
26. 華南で主流を占めていたのは、商業、貿易業であつた。貿易は対岸に台湾を控えている関係から、台湾を中継とするものであり、日本・華南間の貿易の7、8割はそれであつた。『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第二十八冊中南支篇、63頁
27. 華南の内地人総数：1907年 818名、1928年 1209名、1933年 1149名、1935年 1234名。『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第二十八冊中南支篇、60頁
28. 『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第二十八冊中南支篇、43～44頁
29. 丸田慶一「厦門に於ける貨幣金融状況」『東亜同文書院大学東亜調査報告書』昭和十六年度、上海東亜同文書院大学、1942年、118頁
30. 『日本の対支投資』920頁附表
31. 『日本の対支投資』920～921頁
32. 『日本の対支投資』922頁
33. この年の学生数が不明なのは、厦門攻略で戦争状態にあつたためと思われる。
34. 『日本の対支投資』939頁
35. 興亜院によって1939年、厦門文化事業協会が設立されているが本稿では扱わない（『日本の対支投資』983頁）。興亜院については、馬場明『日中関係と外政機構の研究——大正・昭和期——』が詳しい。
36. 『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第二十八冊中南支篇、64頁
37. 『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第二十八冊中南支篇、79頁
38. 『南支那文献目録』（台湾総督府外事部、1943年）には、福建、特に厦門に関する日本人のエッセイ、雑文の類が多く収録されている（126～127頁）。

〔付記〕

今回の調査に当っては、国文学研究資料館王勇、琉球大学石崎博志、日本学術振興会特別研究員岡本弘道の三氏のお世話になった。ここに記して感謝の意を表す。